



〈多B〉…多和文庫B本

〈東A〉…東大所蔵A本

〈東B〉…東大所蔵B本

〈京A〉…京大所蔵A本

〈京B〉…京大所蔵B本

〈陽明〉…陽明文庫蔵本

〈資A〉…京都府立総合資料館蔵A本

〈資B〉…京都府立総合資料館蔵B本

\*なお、略号の掲載順は、前の「菅家文章」巻一注釈稿(四)「(百合会女子大学研究紀要)三一号、平成七年十二月刊」に則り、写本と刊本とに分けて配列した。

【本文】

185 尚書左丞饒席同賦、贈以言、各分一字、探得時(\*左

丞佐世)

讚州刺史自然悲

悲倍以言贈我時

贈我何言爲重寶

當言汝父昔吾師

\*左…底本「右」、この本文を採る本もあるが、改めた。なお、

〔 〕は欄外の注記を意味するものとする。

【校異】

丞…丞(異体字注記アリ)〈別雷〉、各…久〈多A〉〈道A〉、久

〔右傍ニ〕「各」ト注記ス)〈別雷〉、時…時字〈内B〉〈多B〉

〈資A〉〈京B〉〈東A〉〈東B〉、左…右〈尊C〉〈道A〉〈京

A)〈陽明〉、丞…丞(異体字注記アリ)〈別雷〉、左丞佐世…ナ

シ〈内B〉〈尊A〉〈尊B〉〈尊D〉、倍…倍〔右傍ニ〕「信イ」ト

注記ス)〈別雷〉、信〈京A〉〈陽明〉、父…文(蓬左)

【訓読】

185 尚書左丞の饒の席にて同じく贈るに言を以てすといふこと

を賦す、各々一字を分くるに、探りて時を得たり。(左丞

とは佐世なり)

讚州の刺史自然に悲し

悲しきは倍す言を以て我に贈りし時

我に贈るに何の言か重き寶と爲さば

當に汝の父は昔の吾が師なりと言ふべし

【注釈】

◇尚書左丞…藤原佐世のこと。前稿の詩一八四「予爲外吏、

幸待内宴裝束之間、得預公宴者、雖有舊例又殊恩也。

王公依次、行酒詩臣。相國以當次、又不辭益。予前佇

立不行。須臾吟曰、明朝風景屬何人。一吟之後、命予高詠。

蒙命欲詠、心神迷亂、纔發一聲、淚流嗚咽。宴罷歸家、

通夜不睡。默然而止如病胸塞。尚書左丞在傍詳問。故寄一篇

以慰情)にも「尚書左丞在傍詳問」とあった。

◇饒席…藤原佐世が道真のために催してくれた別れの宴席であ

らう。

◇贈以言…この時の詩題。「史記」孔子世家第十七に「魯

南宮敬叔言魯君曰、請與孔子適周。魯君與之一乘車、兩

馬、一豎子。俱適周、問禮。蓋見老子云。辭去而老子送

之曰、吾聞、富貴者送人以財。仁者送人以言。吾不能



(あなたの)「君の父上は昔の自分の師である」と言う言葉であると言うべきであろう

【考察】

この詩は、旅立つ際の道真の心情を、「悲」、「言」、「贈我」と言った叙述を繰り返し用いることで、象るもの。あるいは白話詩の影響を考えてもいいのかもしれない。このように同じ詩に同じ語を繰り返し用いることは、避けるべきことなのかもしれないが、群書類従本「作文大体」「第五詩病」に「念二病者近来不去之。一首之中有同字同心是也」とあって、道真の頃には許容されていたと見ることも出来るかもしれない。

ここでは、ごく普通の何気ない同字を用いることで、度々登場する藤原佐世との心の交流がかえって効果的に描かれていると言えよう。

【本文】

186 相國東閣餞席、探得花

爲吏爲儒報國家

百身獨立一恩涯

欲辭東閣何爲恨

不見明春洛下花

【校異】

閣：閤（川口）（内B）（尊A）（尊B）（尊C）（尊D）（別雷）  
（道A）（多A）（多B）（陽明）（東A）（東B）（京B）（花）  
花字（内B）（東A）（東B）（資A）（獨）（猶）（内B）（涯）  
（尊A）（尊B）（尊D）（閤）（川口）（内B）（尊A）（尊

B）（尊C）（尊D）（別雷）（道A）（多A）（多B）（陽明）（東A）（東B）（京B）

【訓読】

186相國の東閣の餞席にて、探りて花を得たり

吏と爲りて儒と爲りて國家に報いん

百身獨立す一つの恩涯

東閣を辭せんと欲するに何を恨みと爲さん

明春洛下の花を見ざることを

【注釈】

◇相國：前出。太政大臣の唐名。ここでは藤原基経を指す。一八四番詩参照。

◇東閣：東閣に同じ。東方の小門。漢の公孫弘が、宰相となつてからは東にある門を開いて、賢人を招いたと言う故事に因む表現。「漢書」「公孫弘傳」に「弘自見爲舉首起徒歩數年、至宰相封使於是起客館、開東閣以延賢人」への「漢書評林」の注に「師古曰、閤者、小門也、東向開之、避當庭門而引賓客、以別於手象史官屬也」とある。または、「東閣」ならば、梁の何遜が東の門を開いて文人を招致して、梅花を賞した故事に由来する表現か。杜甫の「和裴迪登蜀州東亭送客逢早梅相憶見寄」に「東閣官梅動詩興、還如何遜在楊州」とある。

◇百身獨立一恩涯：數對。「作文大体」柳原本に「文章有十二對詩賦雜筆等同用之一色對、二物對、三同對、四異對、五數對、第五數對、一二、萬億、双兩、多群、衆洪、孤集、所謂、百川小一片、五夜月千里。句云、千峯石筆千株玉、萬樹松蘿萬朵



【校異】

字：家〔右傍ニ「字イ」ト注記ス〕〔別雷〕、業：葉〔川口〕、道：漕〔川口〕〔内B〕〔尊A〕〔尊B〕〔尊C〕〔多A〕〔道A〕、一字欠・空白〔尊D〕、漕〔右傍ニ「道イ」マタ一行イオイテ「イハン」ヲ〕ト注スル〕〔別雷〕

【訓読】

187北堂にて宴を餞す、各々一字を分つ、探りて遷を得たり

我將に南海にて風煙に飽かんとす

更に他人の左遷なりと道はんことを妬む

情、分憂は祖業に非ざることを憶ふ

孔聖の廟門の前に徘徊す

\*道は底本「漕」、これは「導」の異体字であるが、ここは「道」として見た。

◇北堂：大学寮の一施設。積奠儀礼の中で、講論と宴座がそこで行なわれた。「貞観儀式」巻七「積奠講論儀」に「再拜訖贊引出北堂閤門」とある。

◇我將：南海飽風煙：語順が不自然にも思えるが、たとえば「我南海將飽風煙」なら、仄平仄平仄平となり、二四不同に適わない。また「南海我將飽風煙」ならば、平仄仄平仄平となり、これは二六対に不適。よつて道真は、平仄に適用この語順を選んだのであろう。

◇道：底本では「導」。ただし異体字の「漕」。この字は写本では「道」の意味、しかもイフと言う意味で用いられるようである。賀茂別雷神社蔵本の校異はそれを物語るものではないか。一つの可能性として、イフと言う意味を表す記号としてくちへ

んが付されているのかもしれない。

◇左遷：官位を落とすこと。官位を下げて遠方に流罪にすること。『漢書』「周昌傳」の「高祖曰、吾極知其左遷、然吾私憂、

趙、念非公無可者。公不得已強行於、是徒御史大夫昌爲趙相」に付けられた『漢書評林』の注には「師古曰、是時尊、

右而卑左、故謂貶秩位、爲左遷」とある。白詩にも、卷七「馬上作」の「何言左遷去、尚獲專城居」また、卷十

二「琵琶行 并序」の「天和十年、予左遷九江郡司馬」とある。

◇情：つらつら。物事を念入りに行なう様を表す。『類聚名義抄』に「ツラく、アトフ、アツラフ、トモカル、モトム、ア

サヤカナリ、シタリ、ヤトフ、タチマチ」とあるのに従つて読

んだ。

◇分憂：ともに憂える。『晉書』「宣帝紀」に「帝留鎮許昌、

改封向鄉侯、轉撫軍假節、領兵五千、加事中、錄尚書

事、帝固辭。吾於庶事、以夜繼晝、無須臾寧息、此非

以爲榮、乃分憂耳」とある。『白氏文集』に「まみ見受けられ

る表現。卷一七「江州赴忠州、至江陵已來、舟中示舍弟、

五十韻」の「典午猶爲幸、分憂固是榮」、卷五八「思往喜、今

の「謫居終帶鄉關思、領郡猶分邦國憂」とあるのは、何

れも「晉書」「宣帝紀」の故事を踏まえるもの。

◇祖業：先祖の功業。『漢書』「終軍傳」に「夫天命初定、萬事

草創。及秦六合同風、九州共貫、必待明聖潤色、祖業傳

無窮、故周至成王、然後制定」とある。また杜預「春秋左氏傳」

の序に「隱公能弘宣祖業、光啓王室」とあるのは、「文選」

卷四五にも掲載されており、当然、道真が知っていたであろう

